
きみをさがして

佐倉 美南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみをさがして

【Nコード】

N5702R

【作者名】

佐倉 美南

【あらすじ】

「満月の夜に出逢って 真冬の寒い朝に突然消えた きみを今でもさがしている」

美佳が目の前から消えて1年半。

カズキは彼女をさがしつづけていた。

忘れられない恋を探し続ける

カズキの物語。

九州地方でのライブ初日が大成功のうちに終了した。

全国ツアーももう後半戦。

今日も会場は満員御礼。

これなら社長もスタッフも文句はないだろう。

ずっとこの稼業を続けていると、俺は誰のために歌っているのかと思う事がある。

もちろん、俺の歌を愛してくれているファンのため、紛れもなく自分のため。
それから。

一年半前の真冬の寒い日、突然消えたあいつをさがすため。

歌うことで俺は存在する。それをきつとあいつは、美佳は目にするだろう。

「あ、カズキさん。今日のレセプション出席しますよね？」

マネージャーの山本君が俺の姿を見つけて慌てて声をかけてきた。急に周囲のざわめきが戻ってきた。

ライブ終了後のホールは客席もステージにも皓々と明かりがついているんなものをさらけ出している。人が出払ってガランとした客席、薄汚れたひな壇、どこでどう繋がっているかわからないケーブル類。つい1時間前は暗闇と演出されたライトのせいで夢のような空間だったのが嘘みたいだ。

「今日はパス。ちょっと用事がある」

無防備に開かれた舞台袖からたくさんのスタッフが片付けにおわれている中、俺と山本君はその間を少し足早に歩きながら話してい

た。

「九州のライブでは用事がたくさんあるんですね。少しでもいいから……」

渋い顔をする山本君を見て、目の前で手を合わせて『ゴメン』のポーズをとる。

「悪い。明日は必ず出席するから」

頭上から小さなため息が聞こえた

片目を開けて様子を窺うと口をへの字にした山本君の顔。でも、その表情にはさっきのような険しさが無い。

「わかりました。みなさんには体調不良と言っておきますから。でも、九州で一番重要な福岡の歓迎レセプションに穴開けるなんて。ま、今回、福岡は2日間だからいいですけど。重要な明日のレセプションには絶対出てもらいますからね。地元スタッフやスポンサーを交えた歓迎レセプションに顔を出すこともライブを成功させることと同じぐらい大事なことですよ」

俺のマネージャーを始めて約5年。担当になりたての頃はただオロオロするばかりだった彼は今や営業もスケジュール管理もアーティストへの小言も何でもこなす敏腕マネージャーだった。

「わかったよ。そんな母親みたいにするさく言うなって」

小言をクドクドいう山本君に思わず微笑んでしまった。

「カズキさんがいつまでもヤンチャなことばかりするから、こっちも口やかましくなるんですよ、全く。……で、今日もさがしに行くんですか？」

山本君の言葉に笑顔が凍りついた。

彼は温和そうな外見とは裏腹に物事は単刀直入に切り込んでくるタイプだ。

「なかなか見つからなくてな」

ストレートに訊ねられシンプルに答えた。いつだって正直に答えさせてくれる彼の率直さは好ましかった。

彼の責めるような目をまっすぐに見つめて苦笑した。いや、責め

てはいない。いつまで続けるつもりだ、と訴えている。

「じゃ、お疲れ様。また明日」

見つかるまで、と目で答え、きびすを返して出口に向かう。

これから始まる長い夜を思い口元を引き締めた。

九州の各地方に来たときは、ライブが終わった後に明け方まで街をさまよい歩く事が多い。

繁華街を歩いてさがすことに飽きたらレンタカーで夜通し走って小さな街まで行ってみることもよくあった。

誰にも言っていないが、近くにいる人たちは皆気づいている。

美佳をさがすために夜の街をさまよっていることに。

そんな無謀なことをしても見つかる可能性は少ないことはわかっていても、九州に来たらじっとしていられなかった。

少しでも止まると美佳との思い出が熱をもって心を焼き尽くしてしまいそうだから。

未練や執着、そういうものもあるのだろうか？

ただ。

このままでは終われない。あんなに中途半端なままでは先へ進めないから。

俺の、自分の気持ちに決着がつかないんだ。

きちんと会って話して納得して。

いや、本当の理由は。

一目でもいいから逢いたい。

全てが再び動き出すのはそれからだろう。

そんな気がする。

Track 1・Labyrinth 迷宮 (前書き)

章が区切れるごとにその章をイメージした歌詞を載せています
(実験的ですが)

もちろんカズキが作詞しています。

Track 1・Labyrinth 〱 迷宮

今夜もおれはおまえをさがす
見知らぬ街をさまよって

迷宮のようなこの世界と
絡み合ったおれの心
どちらが先におまえを見つけるだろうか？

いろんなものが溢れてる
いろんなものに誘われる
でも本当にほしいものはそんなものじゃない

現実とは裏腹に 疾走するおれの想い
どれだけ夜を駆け抜けたら お前に巡り逢える？

迷宮のようなこの街と
絡み合ったおれの心
どちらが先におまえを見つけるだろうか？

L y r i c s K a z u k i S a h a r a

福岡 2 d a y s、長崎、熊本、宮崎のライブを終えて久しぶりに東京に戻ってきた。

久しぶりの自宅だった。鍵を取り出しそのままドアに手をかけたら抵抗なく開き、苦笑しながら中に入ると、リビングからジャズが聞こえてきた。

「カズキ、おかえり」

「ただいま」

満面の笑顔を浮かべてアサトが迎えてくれた。

昔から仲のよかったオレ達だが、ここ1年は特に親密になり、アサトは頻繁に俺の家を訪れて、俺が留守の時は先に上がって寛いでいることもあった。

もちろん、事前に連絡して俺の了承を得てからだ。

「1週間会わなかっただけなのに、随分会ってない気がするね」

「そうだな。その間、俺、九州だったからな」

「福岡で1日だけライブの日程重なってたから、夜一緒に飲もうと思っただけ電話したのに気がつかないでしょ？」

俺の福岡初日のライブとアサトがいる『KIRIO』のライブが1日だけ同じ県で重なった。

暇があったら、福岡で1杯やるか、とは話していたものの。

「悪い。初日だったし、いろいろ忙しかったんだ」

一晩中さまよっていたとは言えない。

アサトは、もう、と呟きながら少しふくれつつらをして軽く睨んでくる。

そんな子供みたいな彼を見ておどけたように笑って見せた。

アサトとはもう8年ぐらい友人関係が続いている。

俺がデビューした時からの友達だった。

多分、親友といっても言い過ぎではない間柄だろう。

アサトもミュージシャンで、超人気ビジュアル系バンド、『KIRIO』のヴォーカルを担当している。

ビジュアル系のバンドにいただけあって、顔立ちは誰もが見惚れるほど綺麗で、背が高くスタイル抜群の上に歌唱力もあり、その容姿と雰囲気では世間では隙のない多少クールで尖ったイメージが強い。彼自身も世間のイメージを自覚してそういう風に意識的に振舞っているが、本当の彼は感情豊かで少しだけ我儘だ。

でも、その我儘さも甘えたがりの裏返しからくるものらしい。現に俺を本当に困らせるようなことを言ったりしない。

そして、そんな我儘を見せるのは彼が心から信頼している人だけだという事実を知っているのは数少ない。

何か飲もうと冷蔵庫を開けてペットボトルのお茶を取り出しコップに注いだ。

その間、アサトが流していた音楽を止めたらしく、部屋が静かになる。

自分とアサトの分のコップを持ってリビングに入った途端、デッキリからピアノの不協和音が響いてきた。

その瞬間、誰の曲かわかった。

一音一音叩きつけるようなイントロ。それは俺の曲『LOST』。

美佳が突然消えた時期に作った曲だった。

一年半前の満月の夜、俺と美佳は出会った。

その当時、彼女は大好きだった人を突然失った心の傷を癒せず
いた。そんな彼女の数少ない支えが俺の歌で、休暇を利用して東京
まで俺をさがしに来た。

彼女も多分、本当に俺に会えるなんて思っていなかっただろう。
でも、いろんな偶然が重なって会えた。

俺が美佳のことを好きになるにはそんなに時間はかからなかった。

音楽というのは不思議で曲とともにその時関わっていたことを深
く思い出す時がある。

「この曲、すごくいいよね。暗くて重くて、それなのに安らぐんだ。
こんな感じの曲はカズキしか歌えないよね」

アサトの言ったことの半分も聞いていなかった。

美佳が消えて。

そう、今思えばいなくなる日はどこか様子がおかしかった気がする。
る。

どうかしたのか、と、なぜ俺は声をかけなかったのだろうか？
ずっと一緒にいられると思っていた。

彼女が消えて、管理人の淑子さんを問いただしたが、何も知らな
いと答えてはもらえず、まる2日捜し歩いて後は曲作りに集中して
いた。

今まで練ってきた構想や雰囲気を書き紙にして、自分の気持ちや想
いだけを見つめた。

売れる曲を作ってやろうだとか、世間ウケすることなんて全く考

えてなかった。

しかし、皮肉なことにこの曲は売れに売れて俺の代表曲といってもいいぐらいの曲になってしまった。

肝心の俺はといえば、この曲が流れるたび、歌うたびに未だに苦しくてしょうがないのに。

『LOST』が無事リリースできてからは、毎日泥酔して意識が朦朧とするぐらい飲み歩いていた。

美佳と約束したのにな。大酒飲まないって。あの頃は全然守れてなかった。いや、守る必要もないって思ってた。

飲みには大体、アサトと一緒に付き合ってくれて、でも、2週間目ぐらいで『身体続かなくなるよ』って言われて。

その時期あたりだったかな。気分転換も兼ねて今のマンションに引っ越したのは。

今はもう荒れてはないし、深酒もしなくなった。アサトと飲む時も1杯あれば充分で。

約束を守りとおしているというわけではない。

でも、無茶をしそうなきにいつも浮かぶのは美佳の悲しいほほえみ。

最後の方は曇り空から日が射すような笑顔を時たま見せてくれていたけど。

今は、きちんと笑えているのだろうか？

いろんな事が蘇ってきた。

少し、心が痛い。

美佳はなぜ突然消えてしまったのだろうか？

「悪い。曲、替えてくれないか？」

「カズキ……」

アサトが驚いた顔をしてすぐに曲を消した。

再び静けさが戻る。

お茶の入ったコップをアサトに差し出しながら、自分の分を一口飲む。

「『LOST』は滅多に聴かないんだ。本人が一番避けたい曲が一番人気があるなんて皮肉だよな」

「……」

アサトは黙ってコップを受け取る。

「まあ、いろいろ想い出して辛いけど。でも、嫌いじゃないんだ。この曲」

「ゴメン」

「気にするなよ」

シユンとしたアサトを横目で見ながら、どうやって元気を取り戻させようかと考えた。

「メシ、食った？」

アサトに問いかけるとその表情のまま首を横に振る。

「今夜の夕食はパスタ作るけど、食って帰る？」

「本当？ やりい。カズキのパスタ美味しいんだよね」

途端に顔を輝かせたアサトにつられて、フツと笑った。

「じゃ、少し時間がかかるから、そこ座ってな。ワインとチーズ出すから」

「えっ、手伝うよ。一緒につまみながら料理すればいいじゃん」

「アサトに包丁持たせて指でも切られたらアサトのこのメンバーにまた怒られちゃうからな」

一度、アサトに料理を手伝ってもらったら包丁で指を切って、後

で『KIRIO』のメンバーから、絆創膏を巻いた指がテレビで放送されたらどうするんだ、ってかなり怒られてひたすら謝ったことがあった。

売れっ子の女優じゃあるまいし、と思ったが、ビジュアル系のアサトに絆創膏は似合わないと思い返した。

確かに、クールな顔して歌ってるのに、絆創膏はないよな。
「もう切らないよ。少しは上達してるんだ」

料理をするのは好きで、よく自炊もするが、誰かと会話しながら料理するのはもっと楽しい。

『風来館』にいる時もよくみんなでワイワイ言いながら料理してたっけ。

みんな、元気かな？
つと、手が止まる。

「……じゃあ、ワインのコルクぐらい抜いとくよ」
「あ、ああ、よろしく頼むわ」

アサトの明るい声と親しげな笑顔にハッと我に返る。

今は、コイツと一緒にいるんだった。ここは『風来館』じゃなくて、今、住んでいるマンションで。

心がいろんな方向へ飛んでいく。きつと疲れているせいだ。

いや、九州へ行ったせいかもしれない。いつもより、たくさん美佳のことを思い出したから。

気持ち切り替えて、食事を作るためにキッチンへ向かった。後できつとアサトも手伝いに来るはずだ。

今日は指切らせないようにしなきゃな。

いろんなことを思い出しても、弟のようなアサトと一緒にいると楽しい。

俺にとってアサトは一番身近な存在だった。

アサトは日付が変わる直前に自分のマンションへ帰っていった。明日は朝早くからTVの収録があるらしい。

今まで誰かのいた気配が消えて、途端に空調の音がやたらに響いてきた。

『風来館』だったら……。

あの広間兼食堂にいたら、必ずといっていいほど誰かが来て、話したり、一緒に酒飲んだりしてたな。

夜中によくあそこにいたのは、画家の早瀬さん。美佳がきてから俺は酒はあまり飲まなくなったものの、それ以前は、よく2人で酒盛りやって夜明け前に店から帰ってきた美紀さんにカミナリ落とされてたっけ。

その光景を思い出し、目だけ細めて笑った。

今という時の流れに過去の出来事がぴったりと密着して、俺の心はより静かになっていく。

広い部屋に黒を基調としたモダンな家具。傍目からみれば、洗練されていて何不自由ない暮らし。

それなのに。

どうして俺は満たされないんだ？

気分を変えようとキッチンの戸棚からコーヒー豆を、シンク下からはコーヒーマルを取り出した。

コーヒーマルは美佳が部屋に忘れていったものだった。

綺麗に片付けられていた部屋の片隅にミルと、あとチューリップハットがぼつんと。

大事にしていた帽子を忘れていくなんて余程慌てていたのだろう。

コーヒーミルは時たま借りて豆から挽いたコーヒーを飲む事があった。

丁寧にゆっくり挽きながらこの満たされない夜を思い、美佳がいた日々を想う。

粉をフィルターに入れお湯を注ぎ、出来上がるまで窓際に立ち眼下を眺めた。

17階にある俺の部屋からは東京の夜景が遠くまで見える。

ネオンがきらめき、遠くで車の光の帯がゆっくりと動いてそのずっと向こうには小さな光が点滅を繰り返していた。

(そうか、俺が満たされないのは)

ひどく、孤独だからだ。

きらびやかな夜景を眺めながらも、いや、こういう溢れそうな光を目の前にしているからこそ、夜に向かって加速する孤独を止める事ができなかった。

(俺は、どこに向かっていこうとしているのだろうか?)

何をしようとしているのだろうか?

小さくため息をついて、キッチンを振り返った。

コーヒーの抽出が終わって、静かになったところだった。考えたって答えは出ない。前に進んでいくしか。

カズキのマンションを出て階下へ向かった。

今日のカズキはいつもよりぼーっとしていた。というか、九州に行って帰ってきたときはいつもあんな感じ。

多分、まだあの女のこと忘れてないんだろうな。

カズキは美佳、って呼んでたっけ？ 髪が長くて華奢で、どこか凜とした感じの。

2人を見た瞬間、カズキが彼女に惹かれているのがわかった。

あの時は無性に彼女が憎らしかつたのを覚えている。

彼女がいなくなって、あんなにカズキが荒むなんて思っても見なかった。

あの女のこと一言もいわないけど、辛い気持ちがひしひし伝わってきて。

そんな時、引越しを勧めたのは俺だ。だって、あのアパートじゃ、みんなが仲良くて、俺の入る隙間がなかったもの。

1階のロビーを抜けて外に出た。物陰に見たことのある人物がいる。

足音を忍ばせて近づいた。まだこちらには気がついていない。

いつも俺を追い掛け回している週刊誌の記者たちだった。

「よお、毎日お疲れ。いつもカズキのところで悪いな。女っ気がないってわかってんだったら、他のヤツ当たったほうがスクープになると思うけど？」

脅かすつもりで声をかけ、話しこんでいた記者2人はこちらの思惑通りビクツとなり振り返った。

「ア、アサトさん」

驚いた顔がおもしろくてプツと吹き出した。

「見つからないように隠れとかなないとダメだろ？ そんなんじゃ、

すぐ巻かれるぜ？」

口をパクパクさせている彼らをひとしきり笑った後、家路についた。

実際に俺には、今、付き合っている女はいない。

なのに、記者がしつこく追い掛け回してくるのは、後を絶たない噂のせいだ。

恋多き男、それだけに女の扱いが上手で女心のわかる男。優しくて、この人ならたくさん女性の関係を持ってもしようがないと裏で演出させている人物。

一体、誰が噂を流しているかなんて探らないでもわかる。

うちの事務所の社長以外に考えられない。売れるためだったらマスコミすら逆手にとる。そんな人だ。

そのことに俺が文句を言ったことはない。彼の苦笑した顔を見ると何もいえなくなるし、何より俺を本当の子供のように気にかけて公私共に育て上げてくれた。そんな恩もあるから。

コツコツと靴音を響かせながら夜道を歩く。

前に人の気配がしてふと顔を上げた。暗くてはつきりとは見えなかった姿がだんだんはつきりしてくる。

どうやら女性らしい。

白いノースリーブから出た腕はか細く、彼女の華奢さを一層際立たせている。

カズキの住むマンションを見上げる彼女の白い横顔は誰にも真似のできない凜とした雰囲気があった。

あの印象、前に感じた事がある……。

（あれは、美佳？）

なぜ、彼女がこんなところにいるのだろう？

カズキが恋しくて、ここまで追ってきたのだろうか？

ありえないことではない……。

知らぬ間に手を固く握り締めていた。

深く息を吸い、緊張している気持ちを落ち着かせて歩き始めた。靴音に気がついて彼女がこちらを振り返る。俺を見る黒い瞳。

「君は……」

今、この瞬間に気がついたような声音で彼女に近づいていく。

さあ、どんな言葉と演技で乗り切ろう？

優雅にほほえんだ。

Track 2・Lost (前書き)

2章が終わったので歌詞です

Track 2・Lost

凍てついた月夜

君に出逢った

遺跡のようなあの場所で

消えてしまいそうな儚さで

笑えない君は

いつも遠くを見つめていた

どんな傷が

そんな顔をさせているの？

ねえ、ぼくに話してほしい

悲しみも辛さも全部

透明な冬の朝

君は突然消えた

行き先も告げないまま

二度と帰ってこなかった

結局ぼくは最後まで

君の何を見ていたのだろうか？

消えてしまった理由は聞けなかったけれど

それでも一緒に過ごした日々が

君の生きる力になれば

そう思っているよ

このままずっとこのままで

そう願っていたのはぼくだけだった

このままずっとこのままで
そう願っていたのはほくだけだった

L y r i c s K a z u k i S a h a r a

「あ、カズキさん、お疲れ様でしたあ」

今出演しているTVドラマの今日の収録分が終わり、笑顔で会釈をしながらスタジオを歩いた。

TVドラマの出演は待ち時間と拘束時間が長くてちょっと面倒だ。何時か気になって時計を見た。午後11時。

まあ、今日は早い方か。

ドラマは誰がつけたのかわからないが『ストレイト ラヴ!』というなんとも気恥ずかしいタイトルで、若い男女が、数々の困難を乗り越えて最後はハッピーエンドという、今時ありえないほどの純愛物語だ。

主人公は李乃^{りの}という前向きでハチャメチャに明るいう大学生。

その恋人役は浩次という大学生。こいつは、ピュアだけど不器用な感じの役柄。

俺の役は主人公の恋人のライバル役。年上の社会人。金と年上の包容力といろんな策略にモノを言わせて李乃を振り向かせようとする結構な憎まれ役。

正直、このドラマはストーリーどころよりも、今売れている、ヒロイン役の小湊マリノ（こみなとまりの）と浩次役のイケメン人気俳優の、やっと「実現できた」という夢の共演をメインのウリにしている。

実際、視聴率もいいらしい。

主に見ているのはやはり、2人を支持しているような10代後半から20代半ばぐらいの年代が多いようだった。

俺はそういう視聴率稼ぎの人気どころは問題外だし、常に2人（特に李乃）の生活や恋愛にちよっかいを出すこの役に対しておれは乗り気ではなかったが、社長と山本君が強引に押し切ってしまった。

皮肉なことに、半分嫌々ながら引き受けたこの役がかなりいい反響を呼んでいる。

ヒロインを想って、誰も知らないところで苦悩しているところや、何かしら陰があるところがいいのだとか。

まあ、ドラマもいろんな勉強や経験になるし、音楽に興味のない人にも『俺』という存在を知ってもらういい機会だとは思うが、正直、その時間があつたら音楽に接していたいと思う。

「あ、カズキさん。お疲れ様です。今から休憩ですか？」

内心、ギクリとして振り向くと、ドラマのヒロイン李乃役の小湊マリノが立っていた。

「ああ、お疲れ様。もう終わったから、今から帰るところだよ」

「よかったあ、私、今やっと空きができて、夜ご飯にありつけるんですけど、まだみんな収録していて。」

独りで食べるの寂しいし、嫌じゃなかったら夜ご飯一緒に付き合ってくれませんか？」

甘えたような満面の笑みで見つめられる。

心の中でうつ、とうめいた。

本当は乗り気ではないが、全面的に頼ってくるような上目遣いをするると断りの言葉が何も言えなくなってしまう。

「あ、ああ、構わないよ。俺もメシまだだし」

言いながら、それでも何か断る理由を探していた。仕事が終わっているとか。でも、実際仕事は明日でもできることで。

「小湊さんのマネージャーさんは？」

さすがに2人きりはまずいだらうと辺りを見回した。

「後で来るって。先に行つててつて」

「そっか」

「私、近くにいいお店知ってるんです。そこ行きませんか？」

「構わないよ」

連れ立って歩き出した。

俺は彼女の前では用心深く受け身になり、彼女は逆に積極的になる。

ドラマがクランクインしてすぐに気がついたこと。そして、このドラマの仕事に対して、俺をさらに憂鬱にさせていること。

どうやら俺は、この若くて美しい小湊マリノに好かれているようだった。

「でね、私がセリフを言ったら、みんなが笑い出してね」
少しうわの空で小湊マリノの言葉を聞いている。

案内された店は何とも雰囲気のあるイタリアンレストランだった。
今日着ていた服が細身のYシャツに少しばかり仕立てのよいチノ
パンでなかったら、入店を断られていたかもしれない。

もちろん彼女は、ドラマの中から出てきたような清楚なイメージ
のワンピースを着ている。

店全体の照明は最小限にまで暗く、各テーブルの上に明るいライ
トが灯っていた。

やわらかい照明に照らされた彼女の顔は全てが瑞々しく、若さで
はちきれそうだ。

（今、19歳って言ってたっけ？9歳下か……）
遠い昔を見るような目で彼女を見ていた。俺にもそんな頃あった
な。

「カズキさん、私の話、聞いてる？」

「あ、ああ、聞いているよ」

頬をぷつと膨らませて、彼女が身を乗り出してきたのと同時に大
きな胸も迫ってきて、俺は目のやり場に困ってしまった。

そこにタイミングよく料理が運ばれてきてほっとする。時間がな
いので2人とも単品のパスタとサラダ。

「君のマナージャー、遅いね」

話を変えようと今さら意味のないことを言ってみた。

「相原は来ないわ。私、カズキさんと2人でお食事したかったの」

意味あり気な瞳と大人びた口調に改めて彼女を見た。

黒く縁取られた切れ長の目は微かに潤み、透きとおりそうなほど

の茶色の髪は完璧に巻かれて色っぽさを強調している。ふくよかなくちびるに豊かなバストともなれば、普通の男なら、彼女の言葉に舞い上がり何かを期待するかもしれない。

俺は彼女の瞳からずっと視線を外した。

伏せ目がちに少しほえんでいたかもしれない。彼女がどうとるかとは別として、『君の駆け引きには乗らない』という無言の意思表示だった。

彼女のことは嫌いではない。でも、好きでもない。

「さあ、食べよう。料理が冷めちゃうから。……いただきます」

彼女がこちらをじっと見つめていたのがわかったが、構わず食べ始めた。

「カズキさんはお酒は召し上がらないんですか？」

少しの間があっただろうか？その声に彼女を見た。

もう飾らない普通の笑顔を見て、少しだけ心の緊張を解いた。

「いや、飲まないことはないけど、時と場合によるかな。今日は君は未成年で、俺は帰ってから仕事をしたいと思っているから。いくら俺でも酒を飲んで仕事はしないよ」

「お酒、大好きなんですよ？」

彼女の言葉に苦笑した。

「もう、昔ほどは飲まなくなっただな。毎日は飲まないし。かなり飲むのも年に1、2回あればいいほどだよ」

佐原一樹イコール大酒飲み。

かなり手広く知られている事実ではあるが。

「へえ、昔、たくさん飲んでいたってことは、おいしいお酒よく知ってるんですね？」

じゃ、私が20歳になったら、お祝いに飲みに連れて行って下さいね」

屈託のない笑顔と明るい口調でそう言われて思わずこちらも笑顔になった。

「君が20歳になってお酒になれた頃に考えておくよ」

「わあ、うれしい！ 絶対約束ですよ。じゃあ、誕生日来たら連絡するんで携帯の番号とアドレス教えてください！」

些細なことで子供のように楽しそうにはしゃぐ彼女を見ていたら、なんだか微笑ましい気持ちになった。

「……ああ、いいよ」

気がつけば、いいように彼女のペースだったが、それも心地よくて携帯を取り出し、赤外線通信で情報を交換し合った。

店にそぐわないことをされたのが目に付いたのか、店内の隅で待機している店員から派手に咳払いをされて2人して含み笑いをした。

誰かとかこういう風に笑うのも、時には悪くない。

家に着いたら、携帯のメール着信音が鳴った。

見てみると小湊マリノからのメールだった。

今日は俺が食事をおこったので、そのお礼と今からまた収録だという内容だった。

カラフルな絵文字を見ながら、女の人ってメール好きだよなと思
い、少し迷った後、お疲れ様、がんばれよ、と返事をした。

5分しないうちにまたメールの着信音が鳴り、随分暇なんだな、
とチェックしようと携帯を開いたら見慣れないアドレスで、誰だろ
う、と思い本文を見て目を見開いた。

『カズキ、お久しぶりです。

お元気ですか？

1年半ぶりぐらいかしら？』

文字だけのシンプルなメール。

『1年半』というごく身近な人間にしか特別な意味が汲み取れない
キーワード。

心臓が大きな音を立てて暴れていた。

『誰？』

震えそうになる指でやっと返事を打ち返し、携帯を持ったまま動
けないでいるとすぐに返事が来た。

『美佳です』

やっぱり、と思ったが、誰か他人がなりすましているのではない

かという疑問もまだあった。

『久しぶりだな、元気か？』

『元気よ、カズキは？』

『俺は相変わらずだよ』

『うん、テレビでよく見てる』

そんなやりとりの後、俺はひとつカマをかけてみた。

『あの帽子被っている人みると美佳を思い出すよ。なんだっけ？あれ。今でも愛用してるんだろ？』

もし、これで違う答えが返ってきたら別人だ。
でも、ピッタリだったら……。

しばらくして、返信がきた。

『チューリップハットね。』

あれ、東京に置いて来ちゃって手元じゃないの。

あと、コーヒーマイルもそっちに忘れてる。

カズキが預かってくれてるって、聞ける。悪いわね』

「……」

俺と美佳と風来館のごく限られた人間しか知らない情報。

（本当に、美佳なのか……？）

真夏の深夜。

不思議な夢を見ているようで、その場から長い時間動けないでい

た。

「え、海？」

「そう、海にドライブに行かないかな、と思って。予定では夜だけだ」

シャワーを浴びてリビングに戻ってきたら、アサトが来ていて開口一番そんなことを言い出した。

「メンバーは俺入れて5人。カズキがドラマで共演している小湊マリンちゃんも来るし。どう？」

続けて、顔だけ知っている俳優やミュージシャンの名前を言う。

「小湊さんかあ。最近一緒になる事がないから。元気かな？」

向こうもこちらも忙しくてかなり会ってない気がした。

「最近カズキ元気ないから。ドライブに行つて騒げば気分転換になるんじゃないかと思って」

思わずアサトを見た。

相変わらず鋭いというか、人のことをよく見ている。

アサトはそういうところがあった。

周囲にはワガママで強気な発言をよくするのに、人の行動や考えていることに対してアンテナを張り巡らしているようなそんな一面がある。

俺自身は別に元気がないわけではないが、美佳とメールをやり取りした日から、気が抜けるとぼーっとしている時間が多くなった。

「元気がないわけじゃないけど。ま、ドライブもいいかもな」

「じゃあ、決まりだね」

俺を見ていたアサトがにつこり笑った。俺もそんなアサトをみ思わず微笑む。

アサトが心から笑う姿は見ていてほつとする。

（いつもそんな顔してりゃあいいのにさ……）

普段アサトが世間に見せている表情や感情は、世間の人たちが彼に対して望んでいるイメージそのままを演出しているに過ぎない。

楽しい時も辛い時も。どんな時もKIRIOのヴォーカル『アサト』を演じる。

まるで、そうしないと存在する理由がないと言わんばかりに。

アサトと親しくなればなるほど、彼が心の底にいつも抱えている緊張感が伝わって痛々しく思う事がよくあった。

『もつと心許した人たちと一緒にいるときみたいに自然体でいいんじゃないのか？』

何度かアサトに言った事があったが、そんな時、彼は決まって寂しそうに笑って目を伏せるだけだった。

突然携帯メールの着信音が鳴った。

時計を見ると20時10分。この時間のメールは多分美佳だろう。

「カズキ、鳴ってるよ」

「ああ。メール」

テーブルの上においてある携帯をとって内容を確認する。

やはり、美佳からだった。

あの日から1週間が過ぎ、回数こそ少ないがメールのやり取りは毎日のようにしていた。

他愛のないことばかり書いていたが、それでも、思わず口元がほころぶ。

（後で返事をしておう。……そろそろ会いたいんだけどな）

答えを出したかった。

決着をつけるのか、それともこのままなのか。

そういうことを考えたら心が少しピリツとしたが、今はアサトと

一緒にいて、そんなことを考える時ではない。気持ちを封じ込めるように携帯を閉じた。

その時のアサトの不安そうな視線に俺は気がつくはずもなかった。

しばらく経って、ドライブへ行くのに都合のよい日を選び、海へドライブに出かけた。

アサトの知人のワゴン車に乗り込む。

ゆっくりできるように3列シートが一番後ろを選んだらすかさず小湊マリノが隣に来た。

「カズキさん、お久しぶりです。お元気でしたか？」

「あ、ああ」

今日の彼女の服はまるでこちらの視線を誘うような胸元が深く開いた服で、おまけにぴったり身体に張りつき丈が短い。肉感的な胸元とは対照的に、すっとした下腹が必要以上に露出している。

何というか、彼女を見ていたら身体のラインを想像しそうで、目のやり場に変大困る。

彼女から視線を外し、前を見たら助手席で含み笑いをしたアサトと目が合った。困っている俺を見て明らかにおもしろがっている。

（アサートー）

気がついていんだったら助け舟を出せよ、と目で訴えたらアサトは目を細めて

「小湊さん、後ろのトランクにあるジュースの入った袋取ってくださいかな？」

と声をかけた。

彼女は、はあいと返事をして後ろを向き手を伸ばして袋を探し始めた。

視線と関心がそれてほっとしたが、下腹どころか脇腹がチラチラ見えて、その上、背もたれに押し付けた豊かな胸が……なんというか柔らかそう押しつぶされているの間近でみてしまい、それはそれで困った。

そんな俺の様子を見て、アサトは今にも噴き出さんばかりに笑い

をこらえている。

海に着いたら、素早く照明がセッティングされ、大量の肉、野菜類とかなりの量のアルコール類が手際よく用意されてバーベキュー大会が始まった。

俺は、そんなこと一言も聞いていなくて面食らったが、大勢で食卓を囲むのはやはり楽しい。『風来館』以来だった。

「はい、カズキさん。はい、マリノちゃん」

当然のように運転手以外のメンバーにビールが配られた。

隣を見ると、彼女もビールを受け取っていて、俺は少し慌てた。

「小湊さんはジュースかお茶だよ。未成年なんだから」

「えーダメですかあ？ もうすぐ20歳だし」

「ダメだよ。ほら、貸して」

「えー」

「『えー』じゃないよ。未成年は酒はダメ。それに問題が起こったら大変だし、みんなに迷惑かけるんだぞ」

眉をひそめながら、改めて彼女を見た。瞳に楽しそうな光が浮かんでいて、明らかに今のやりとりを楽しんでいる。

（1歩間違えれば、大変なことになるってわからないのか？）

この前も未成年の俳優が飲酒して週刊誌に掲載されて大きな問題になったばかりだった。

それでなくても彼女は売れっ子なのだ。週刊誌の記者にゴシップねたになるようなエサは与えてはいけない。

「ずっと思ってたんだけど、カズキさんで、マリノちゃんのお守役ですか？」

「は？」

「気がつけば、いつも2人一緒にいるし、仲いいですよー」

アサトの女友達とかいってた、駆け出しのミュージシャン2人組が甲高い声で親しげに話しかけてきた。

女性はこの手の話題が好きだな。

同年代で顔見知りとか言っていたミュージシャンと小湊マリノは勝手に盛り上がった声を上げて笑っていた。

「そうなの。カズキさんね、いつも私のこと気にかけて大事にしてくれるの」

話題についたじろきそうになったが、そういうのではないと否定しようとしたら、彼女がそう割って入った。

そして、ねっ、といいながらこちらを振り返って、缶ビールを渡してくる。

一見おもしろがっているような、でも挑むような真剣な表情はいつもの彼女ではないような気がしてハッとしたが、直後に、すいませんお茶下さい、と元氣よく叫ぶ彼女に、気のせいと思い直した。

若い彼女に気持ちを振り回されては、たまらない。

バーベキューは盛り上がり、大いに食べて飲んだ。

（飲みすぎたかな？）

頭の芯がかなりボンヤリする。

最初はみんな楽しんでいたが、時間が経つとそれぞれに思い思いのことをはじめ、メンバーの1人が最新式のデジタルカメラを持つてきた、という話からみんなその持ち主の周りに集まっていたが、俺は仲間には加わらず、海辺を歩き始めた。

「カズキさあーん」

潮風に吹かれながら心地よく歩いていたら聞き慣れた声が聞こえてきた。

「やつと追いついた。途中でいなくなるから」

走ってきたのか息を乱して隣に並んできたのは、やはり小湊マリノだ。

「みんなと一緒にいなくていいの？」

ニコニコしている彼女にあまり構わないフリをして歩き続ける。

「カズキさんと一緒にいるほうが楽しいから」

「……」

2人、無言で歩いた。

身体中に回った酒の酔いと絶え間ないさざ波の心地よい音が気分をゆつたりさせていたせいもあるが、彼女が隣で歩くことをやりわりとでも拒絶しなかった。

いつもなら、やんわりとした拒絶をしている。

やんわりとしかできないのは彼女がなんとか自分の想いを行動で周囲の人間とオレに気づかせようとしているからだ。

ドラマの現場の人は『マリノちゃんて、カズキさんに気があるんだね』とハッキリと俺に言ってくる人も多い。俺自身は『そうなのかな？』ってトボけて流すが。

本人からはつきりとした言葉で言われたならば、はつきりと言いつ返せるだろうが、曖昧なことでは曖昧にしか返せない。

だからといって、その気もないのに期待をもたせるのはある意味罪だ。

俺がずっと好きなのは……。

もの思いにふけていて気がつかなかったが、いつもはおしゃべりな彼女がまるで何も話さない。

月に照らされた海を見て、時たま何か言いたそうに俺に視線を向けて妙にそわそわしている。

「どうかした？」

気になって彼女に言葉をかけた。急に立ち止まる彼女。俺もつられて立ち止まる。

「あのね、カズキさん。私……」

彼女の真剣な瞳と伝わってくる緊張感。

次に出てくる言葉がわかってしまった。

『好き』と言われたら、どついつ言葉で断つたらいいか……。

彼女と無言で見つめあっていると、視界の端に白いものがちらついていた。

何気に目を向けると、少し先の防波堤に白い服を来た女性が外灯に照らされて立っている。

遠すぎて顔の詳細までわからないが、長い黒髪に、よく見慣れた華奢な身体つき。

あれは……。

「美佳……」

目にした瞬間、走り出していた。
後に残された小湊マリノのことなど忘れて。

2人の後を気づかれないように歩いていた。
要するに尾行していた。

カズキとマリノが立ち止まって真剣な顔をして見つめ合っていたが、彼はすぐに彼女を置き去りにして走りだした。

暗闇の向こう、外灯に浮かび上がる人影が見える。

白く、華奢な女。

それを確認すると口元だけで小さく笑った。

マリノはというと、肩透かしを食らったように呆気にとられている。

「残念だったね」

「アサトさん、見てたんですか？」

近づきながら声をかけたら、マリノは露骨に眉をひそめて頬を膨らませ、

オレはその女優らしからぬあまりのマヌケぶらに、バカじゃねえの、と目を細めた。

いつでもどこでも、それらしからぬ表情や行動をするやつは、心から軽蔑する。

こんな表情、あいつ、女優であることを忘れている。

ただの、普通の女に成り下がっている。

俺たちの世界、しょっちゅう気を抜いていたらいずれ足元をすくわれるんだ。

安らいでいいのは1人の時と、本当に心を許せるやつの前だけ。

「カズキに置いていかれたんだね。ひどいことをするなあ。俺だっ

たら、こんなかわいい子放っておかないのに」

気だるい艶かしい表情を作ってマリノに流し目をくれてやった。彼女は俺の言葉と表情に、口が半開きのだらしな顔をして見られている。

こんな女の相手をするのはある意味本気で気だるい。

俺にとっては、こんなセリフや表情朝飯前だ。

女の相手よりも、カズキの料理を手伝って包丁で野菜の皮をむくほうが難しいくらいで。

『野菜と包丁』で、カズキと料理をする場面が心をよぎった。

カズキは他にもいると思っっているみたいだが、この世界で俺が心を許せる相手はカズキだけだった。

家族と同じくらい、と思っってみたが、実際は、俺自身が家族の絆というものよくわからないせいで比べようがなかった。

家族の絆って、家族の愛情ってどんな感じなんだ？

心の奥底でそんなことをふと思っしたが、その思いはすぐに消えた。

「カズキのこと好きなんでしょ？ マリノちゃん若くてかわいいんだからさ、色仕掛けで落としちゃえば？ 男なんて単純だよ」

クスクス笑いながらマリノの表情をうかがう。まんざらでもない顔をしている。自分の容姿と男ウケするスタイルにかなりの自信があるのだろう。

（若さも美貌も完璧なスタイルでさえ、年齢を重ねれば損なわれていくのに）

彼女の顔色を見て、心の中で『バカだな』と呟いて、それでも、そんな感情は顔に出さずに言葉を続ける。

「カズキのこといろいろ教えてあげるよ。あと、気になっていると思うけど『美佳』のことね」

マリノの顔がパツと輝く。その表情を見つめて優雅に笑いかけた。

- - - 君みたいな子、カズキが好きになるわけないのだから。
こっぴどく振られちゃえばいいよ - - -

そう思いながら。

砂浜を全速力で走って、美佳のいる防波堤まで近いようでかなりの距離があつたが、やっと防波堤の始まりにたどり着いた。

ビールを飲んだせいか、妙に脈が速く、一旦立ち止まって息を整えて、前方を見た。

まっすぐな防波堤の中間辺りに美佳はいるようだ。

俺たちの距離は少し遠い。200mぐらいだろうか？

その上、後から後から流れ出る汗が目に入り、視界が霞んで表情までは見えなかった。

お互い見つめあう。美佳しか見えなくて。あとは自分の荒い呼吸だけが全てだった。

やっと逢えるのだ。実感がわかなくて夢を見ているようだった。

1年半。短いようでやはり長かった。

美佳がほえんだような気がして、それに誘われるように1歩踏み出した。

その途端。

彼女は防波堤を飛び降り闇に消えた。

ビクリして駆け寄つたが、もう人影すら見えなくてただの暗い海が広がるばかりだった。

(どうして……)

くちびるを噛んでしばらく俯く。

気持ち収まってふと空を見上げると、丸い月が虚ろな空に浮か

んでいるだけだった。

Track 3・メロン（前書き）

3章終了で歌詞です。

Track 3・メロン

君の胸にある
2つのメロン

無邪気に振る舞っても
誘惑するたわわな実り
甘い果肉 その香りは
どこにいても刺激的

今日も君のメロンに誘われて
危うい場所に落ちていきそうさ

おさな過ぎて 興味ない
でも 心は子供 身体はセクシー

そのジューシーさが鬱陶しいのに
時たま気まぐれに
その甘い果肉にかじりついて
味わいつくしたい
そんな風に思う僕はとても不純かい？

今日も君はメロンを抱えて
僕を追ってくる

今日も君はメロンを抱えて
僕を追ってくる

L
y
r
i
c
s

K
a
z
u
k
i

S
a
h
a
r
a

結局あれから美佳を見つけることができず、その上、真夏の暑さに倦んで帰りはうわの空だった。

小湊マリノがしきりに話しかけてきたが、ほとんど覚えていない。なぜか、アサトも普通なようで心なしか元気がなかった。

それから、しばらく俺はドラマの収録やラジオ出演、アサトはドキュメンタリー番組やコンサートで多忙な日々を過ごし、約半月ぶりに会えたある日のこと。

「あのさ、カズキ」

俺は仕事をしながらアサトを見る。

仕事、といったも言葉遊びに近い。何か詩になりそうな言葉を思いついてはノートに書いている。それだけ。

アサトは真向かいの1人掛けのソファに膝を抱えて座っている。小さく折りたたまれた身体が革張りの黒色に浮かび上がっていた。

「寒いかな？」

おれは程よく空調が効いて快適だと思っていたが。

「うつん、大丈夫だよ。寒くない」

首を横に振るアサトを見て、ノートに目を落としたが、しばらくして視線を感じて目を上げたらアサトがじつとこちらを見ていた。

「どうした？」

「カズキ、俺の昔のこと詳しくは知らないよね？」

「そうだな、親しくなってからのことならよく知ってるけど」

アサトの過去は周りの人の話や噂などでよく耳にするが本人からは直接聞いたことがなかった。

周りの人の話も、それ、絶対ウソだろ、と思うことが多くて取りあう気にもなれなかったけれど。

「聞きたい？」

しばらくアサトの顔をじっと見つめる。

口調は明るいのに、アサトの瞳は、話さずにはいられないような不安そうな光が見え隠れしていた。

「話したいなら、聞くけど？」

アサトの気持ちを押すように穏やかに笑うと彼の硬い表情から力が抜けていくのがわかる。

（話、聞いてほしいっていいばいのに）

素直じゃないな、と親しみを込めて目を細めると、アサトは淡くほほえみ語りはじめた。

『オレが生まれて一番最初の記憶は、ピアノとオレにピアノを教えてくれる先生。』

何歳ぐらいだろう？　きつと3歳ぐらいだと思っけど。

オレの最初の記憶に両親はいないよ。不思議と両親と一緒に思い出がほとんどないんだ。

それが何かを暗示していたのかな？

4歳の頃に両親は離婚しちゃってね。オレは父親に引き取られた。それからは、父親の実家で父と祖母と一緒に暮らしてた。

父は仕事がとても忙しい人で、毎日オレが寝た後真夜中に帰ってくることもあった。勤務地が遠くて、本当に忙しいときは家にも帰ってこなかったりすることが多かった。

お手伝いさんはいたんだ。でも、祖母とそれはそれは大きな屋敷に2人きりで暮らしていたようなもんだっただな。

祖母は必要以上にオレに関わらないようにしていた。向けられる視線も冷たい事が多くて。

え？なぜかって？

オレの父親、昔から続く旧家の長男。でも、祖父がヨソの女と浮気してできた子供なんだ。

本妻である祖母との間に子供ができなくて、中学卒業と同時に今の家に養子に入ったと。だから祖母は父にもオレにも冷たいのだと随分たってから屋敷のお手伝いさんが教えてくれたよ。

母親似の父はとても綺麗な顔立ちで、父を見るたび祖父を奪った憎い妾のことを思い出すのよ、と面白がって近所の人たちと噂して

いるのも偶然聞いたりしてね。

また、その綺麗な顔立ちの父親似のオレはどこにも居場所がなかったし、多忙で2、3ヶ月に1度顔を会わせばいい方の父に頼ることもできなくて。

父に心配かけたくない一心で、祖母はともかわいがってくれるからと本当のこととも言えなかったよ。

オレが6歳の頃、祖母が他界した。

そして、その一年後、父は薦められた見合いを断れず職場の重役の娘と再婚して、父と継母と彼女の連れ子の義姉とオレの新しい生活が始まった。

最初の1、2年は順調だったと思う。どこかしらよそよそしくても、束の間の安らぎを感じていた。

でも、少しずつ何かがすれ違って、父と継母の仲は日を追うごとに歪んでいくのが手に取るようにわかったんだ。

え？原因は何かって？

まあ、待つて。そんなに焦らなくてもすぐにわかるから。

派手な言い争いこそしなかったけど、継母はかなり父を邪険に扱って辛く当たっていたよ。

そしてある日、父はオレを置いて突然家を出た。勤めていた会社も辞めて行方をくらませた。

『元気で暮らせよ』

寂しそうな目で去っていく姿はしばらく毎日のように夢に出てきてオレを苦しめた。

表向きは継母が不甲斐ない父に愛想をつかして、会社の重役である自分の父にありもしない悪い噂を言い含めて、それを鵜呑みにした重役との関係も悪化したのが原因で離婚と同時に会社も辞めなくてはいけなくなっただけらしい。

けれど、継母は『あなたは知らない。アサトを置いて早く出て行って』と言つてのをオレも陰で何度か聞いたことがあった。

なぜかわかる？

継母が『オレがあまりにかわいいので独り占めしたかった』からだ、しばらくして本人の口から直接聞いたよ。

仕事が忙しくて2、3ヶ月に1回会うような状況でも、オレの目と気持ちに父にいつてしまうのがどうしても我慢できなかった、と彼女はそう言つて妙に潤んだ瞳でオレを見るんだ。

彼女の行き過ぎた気持ちの中に親の愛情以上のものを感じていた。怖かった。

オレは幼いながらも感覚的には勘付いていたよ。

でも、それを頭で理解するほど、言葉で表現できるほど、そして反抗できるほど大人でもなかった。

たった9歳の弱い子供でしかなかったオレは、継母の過剰な愛情も、父との別れもどうすることもできなかったんだよ。

今思えば、随分大人びた子供だった気がする。

オレを置き去りにした父親を心底恨んだが、騒ぎ立てて反抗しても1人では生きていけないことはわかっていた。

継母の下で、彼女の過度な愛情と何かを求めるような視線を避け、顔色と心の動きをいつも警戒しながら生活していた。

しかし、オレがそしらぬ振りをしても、向こうがオレを1人の男として見ている、という態度はオレの成長と共に露骨さを増したよ。義姉はそういう空気を察して小学校高学年の頃から問題行動が多くなって、中学入学と同時に『全部あんたのせいよ！ この悪魔』という捨てゼリフを残して家に帰らなくなったよ。

世間的には決して褒められない行動だったけど、オレはそういう勇気のある姉が羨ましかった。

15歳になったばかりのある日、学校から帰つてくると後ろから継母が音もなく近寄つてきて「肩にゴミがついているわ」と言つて肩に触れた瞬間、背中ごと強く抱きしめられたんだ。

羽交い絞めにされたと言つてもいいかもしれない。

それから彼女は凍り付いて動けないオレの耳元で「アサト」と甘い声で呟いた。

情けないけど、そのねつとりとした感情が吐き気をもよおすくらい嫌で同じくらい怖かった。

渾身の力を込めて彼女を振りほどいて、腕の中から逃れることしかできなかったよ。

オレの心はもう壊れる寸前で、中学卒業と同時に家を飛び出して東京に出てきた。

目的はなかった。ただ、都会の人ごみに紛れて自分の存在を消したかったんだ。

金も何もなくて、東京の繁華街をさまよつたな。見知らぬ女にメシおごつてもらつたり、年上の女の家でヒモみたいな生活してみたり。ホームレスまがいのこととして襲われそうになったり。

でも、結局そんな生活は長く続かなくて、何も食べないままフラフラしていたら、路上で倒れてしまって、目の前にあった高級クラブのオーナーに助けられてそのまま居候することになったんだ。

オーナーはいい、って言つただけけど、せめてもの罪滅ぼしで時々たま店、手伝つたりしてた。

って言つても、俺は接客や調理とかじゃなくて、店にあるピアノで即興で曲を演奏したり弾き語りしてたんだ。

ピアノ弾いているときは全てを忘れられた。

俺を取り巻く現実も、苦しさも、憎しみも。

音楽の中だけは、オレはマトモな一人の人間だった。

いつものようにピアノの演奏を終えてステージを降りたら、知らない金持ちそうな女から声をかけられた。

その人はオーナーからオレの経緯を聞いていたんだろうな。

「今日からうちに来なさい。高校も通わせてあげるわ。そのかわり、ピアノと音楽全般の本格的なレッスンを受けること。文句はないわよね？」

最後は問いかけというより、確認という感じの口調だった。

「あなた、音楽の才能あるわ。それを伸ばすための援助は惜しまない。あなたの家の人にも話しつけましょう」

いきなり現れた高飛車で単刀直入な人に面食らいオーナーをちらりと見たら、君の将来のためにはここににいるよりかは、秋乃さんの所にお世話になったほうがいいと言われて、その夜中には身一つでオレは彼女の家にいた。

秋乃さんの家は、家っていうより邸宅と呼んだほうがいいぐらい広くて高級なものばかりで、こういう仕事したらこんな家建てられるんだよ、って思ったな。

彼女は、常にオレとの距離を保つ人で、仲はよかったけど、必要以上に親しくなることはなかった。今思えば、オレのことを思っそういう風に接してくれていたのかもしれない。

1年遅れで高校に通い始めて、学校のこと以外は全てピアノとボーカルと音楽の基礎のレッスンばかりだったけど、レッスンも学校生活も楽しかったよ。

17歳の時に今の事務所に秋乃さんと出入りするようになった。社長は「私には娘ばかりで息子がいないから」とあの頃からいろいろ世話になってかわいがってもらった。

ご飯をおごってもらったり、ミュージシャンのコンサートやリハール風景をタダで見せてもらったの覚えている。

秋乃さんとの出会いは突然だったけど、別れも突然だったよ。

高校卒業と同時に、音楽のレッスンを今までどおり受けていくことを条件に、住むマンションを用意するから、これからは独りで生きていけ、と秋乃さんの邸宅から追い出された。

「あなたには、これからの将来の行く道を教えてあげたつもり」

別れ際、秋乃さんはそう言ったよ。

多分、どんなジャンルでもいいから音楽の道に進んでほしかったんだと思うよ。

その当時、それを一番願っていたのは秋乃さんなんだ。

それを押し付けることはしなかったけどね。

そして、オレは秋乃さんのそういう思いに気がつきもしなかった。

ただ「また、捨てられた」という思いばかりが強かったから。

ショックも大きかったけど、正直、途方にもくれていたよ。豪華なマンションとピアノはあっても、食べるものがないんだから。

その当時のオレは本当にどうしていいかわからなくて、とりあえず、生活していくために偶然スカウトされたホストの店で働いたよ。荒んだ生活で、音楽をマトモにできるような状態ではなかったけど、事務所の社長とは月1回程度は会ってメシ食ったりしてた。会う度に『ミュージシャンになるつもりはないのか？』と言われて続けていたけれど、ずっと答えを出せずにいた。心の奥底では、オレがまともにできることは音楽しかないと思っていたし、音楽で身を立てたいとも思っていた。

しかし、ためらっていたのにはそれなりの理由があったんだ。

実の両親に捨てられ、継母には子供としてではなく男として見られ、15歳で家出して他人の女に拾われて養われて、捨てられて、ホストをしている自分。

音楽で身を立てるような、そんな華やかな世界に羽ばたくには、オレは汚れ過ぎている。

いつもの問いに思いつめた目でそう答えたら、社長は深く頷いた。

確かに、アサト君は、他の人と違い特殊な生い立ちだ。仮にミュージシャンになれば、そういう過去もいずれは暴かれる日が来るかもしれない。

しかし、君の過去のほとんどは、君が望んでそうだったものではないだろう？

アサト君には人をひきつけて離さない音楽のセンスと豊かな才能がある。それは自信を持っていい。

それから君自身は気がついていないとは思うが、君には人の心の磁場を狂わせるほどのカリスマ性とたぐいまれな美しさが備わっている。普通の世界ではトラブルや不幸になるそれも、芸能界では長所になり得るかもしれない。

君の生い立ちが人が聞いたら頭を抱え込むような過去だ。

でも、そんな人生に絶望してもおかしくない君がミュージシャンになれば、そして過去も辛さもはね返すように輝けば輝くほど、悩み迷走する人たちの希望や夢になれると、そうは思わないか？

過去は変えられない。でも未来は今から選ぶ事ができるんだ。

現在の悩める人たちの希望の星になれ。

負の感情と闇のような暗い過去しか持ってなかったオレに、社長は、「輝け」と言ってくれた。

オレは他の国の言葉でも聞いているように呆然と話を聞くしかなかったけど、後日、社長の事務所の音楽オーディションを受けた。コネや外見だけで、というのは嫌だったんだ。きちんと音楽の実力を評価してほしかったから。

社長はもちろん、他の幹部たちの評価も納得のいくものだったらしく、オレはオーディションに合格して『KIRIO』のヴォーカルとしてデビューしたんだ。

『KIRIO』で活躍して一応の成功を収めたとしても、大勢の人たちが賞賛してくれても、オレは自分のことを汚れた人間で、いつまた捨てられるかもしれないという焦りにも似たものを感じるんだ。怖いんだ。だから……』

「アサト」

アサトの深みにはまっっていく思いを断ち切るように俺は強い口調で名前を呼んだ。

「俺はお前がデビューする前から知ってるけど、一度も汚れたヤツと思ったことないぞ？」

アサトと出会った頃、俺はまだデビューしたばかりで、事務所の社長同士が仲がいいせいか、よくうちの社長に用事を頼まれてアサトの事務所にも頻繁に出入りしていた。

アサトの第一印象は誰もが心奪われそうな美しい少年。

しかし、それ以上に少年らしくない暗い眼が気になって、どうかしたのかな？ と思いながら挨拶したのを覚えている。

そういえば、その時、お金持ちそうな女性も一緒にいたな。

「大抵の人は、値踏みするか好奇の目でオレを見るんだ。でも、カズキはオレに普通だった。一番最初もいたわるような優しい笑顔を見せてくれたの、今でも覚えてる」

伏せていた目を上げてこちらを見たアサトの表情は心なしか力かなかった。

「俺は、アサトのこと弟みたいに大事に思ってるよ。気が合うから

一緒にツルんでるんだし、お前の過去がどうであろうと、俺は気にしない。大事なのは『今』だろう?」

一体、どうしたんだ? そう目で問いかけるとアサトは淡く笑って目を伏せた。

「そうだね、大事なのは今だから」

「あまり細かく考えすぎるなよ? どう生きたかは大事なことだけど、どう生きるかのほうが、もっと大事なんだから」

ほほえみながらもアサトの不安な瞳の色は消えない。

会話が途切れて夜の深さに気がついた。

時間は夜中の2時を回ろうとしていた。

Track 4・Winter memories

あなたに甘えてた

そばにいてと泣きながら

迷惑がられるのが怖かった

触れられないまま

別れの予感

わかってた

どうにもならないこと

今は何もないけど

それでも私は強く生きてく

あなたの優しさと共に生きた

あの季節を忘れない

離れていくあなたを

ひきとめることすら

できなかった

別れを感じたあの瞬間

あなたと歩いた季節が

辛かったけれど

今なら言える

私 とても幸せだったよ

今は何もないけど

それでも私は強く生きてく
あなたの優しさと共に生きた
あの季節を忘れたくないから

ずっとワガママばかり

泣いてばかり

ごめんね

謝るのは簡単

だけど

強く生きてく誓いに

この言葉をあなたに捧げるよ

心いっぱいの優しさを……

ありがとう

L y r i c s K a z u k i S a h a r a

今日何度目のため息をついただろう？

「カズキさん、しっかりしてくださいよ。撮影中にそんな顔してちゃ、ダメですよ。プロなんですから」

山本君は丁寧な車の運転をしながら、少し厳しい口調で俺を諭した。

しかし、わかってるよ、と言ったそばから大きなため息が出る。

「カズキさんっ！」

「はいはい」

「返事は1回です。クセになってベテランの方々の前でそんな返事をしてしまったらどうするんですか」

「はい」

「……」

いじけて、拗ねたような子供の返事に山本君は、しばし無言になる。

俺のやる気のなさを見て、今日の山本君は意地悪な姑並に口うるさい。そして、いつもなら現場まで自分で行くのだが、逃げ出しはしないかと心配した山本君自らの送迎つきだった。

今日は例のドラマの収録がある。

なぜこんなに気が重いのかといえば、李乃役の小湊マリノとのキスシーンがあるのだ。

彼女とはこの前のドライブ以来会っていない。

何か言いたそうだった彼女を置き去りにして美佳を捜しに走ってしまったことも気分を重くさせている。

美佳とのメールのやりとりは続いてはいるが、あのドライブの日のことはぐらかされたままだ。もちろん、会う約束も。

「とにかく、しっかりしてくださいね、仕事なんですから」

「わかってるよ」

キス、という言葉から、美佳のくちびるを思い出してみる。彼女に口づける場面を想像してみる。

一緒に過ごした冬の季節を思い出す。少し切なくて、冬の陽だまりのように優しかった日々。

求めるように空を見上げたら、今をひとりで生きる真夏の空しか見えなかった。

「真似ですからね、あくまで真似なんですから。本当にしないでくださいよ」

「大丈夫ですから」

スタジオ入りした直後からマリノのマネージャー、相原さんはキスシーンの件で俺たちに付きまとい、彼と山本君は同じやり取りを続けていた。

もつかれこれ10分。

俺は最初の1回だけ対応して、後は口をつぐんで山本君に任せていた。

「濃厚なものをされたら、清纯派のイメージに傷がつくんですから」品のない言い方に不快感を隠せず、冷たい視線を向ける。

銀縁メガネを神経質そうに何度も押し上げながら、相原さんはねちっこい視線で俺を見ていた。

「最初あらずじには入っていないものを、そちらの強い要求で急遽つけ加えられたものだと思っています。俺は取り止めになっても一向に構わないんです。何なら俺が監督に取り止めるよう直談判してもいいですよ」

そう言つと、相原さんは慌てたような顔をした。

そんなことをされたら、後でマリノにこっぴどく叱られるのだからう。

3人の間に張り詰めた沈黙が落ち、険悪な雰囲気が変わろうとしたその矢先にそれを切り裂くような、高い靴音が響いてきた。

「相原、やめなさい！」

高い靴音以上に響きのある声にそちらを見ると、前方から小湊マリノが現れた。

「私のマネージャーが変な言いがかりをつけて申し訳ございません。さあ、あなたも早く謝りなさい」

優雅に、でも毅然とした態度で、頭を下げたマリノは真剣な目で俺をみた。

「マリノちゃん、でも……」

相原さんがすぎるような声を出してマリノを見る。

「人様に無礼な態度をとって、謝りの言葉ひとつないのですか。恥を知りなさい！」

怒りを抑えた冷静な声に相原さんは圧倒されて、すみませんでした、と形だけの言葉を俺たちに投げつけ、それを見たマリノはもう一度小さく頭を下げてた。

「キスシーンの件は、私の方から取り下げていただくよう、監督に言っておきますね。こちらのマネージャーがこんなトラブルを起こしては申し訳ありませんもの」

少しほえんだ表情にいつもの力がなかった。

一礼して、立ち去ろうと数歩歩いて彼女はこちらを振り返った。

「私が言い出したんじゃないのですよ。監督の発案ですの。その提案に私は乗り気ではなかったのです」

少し驚いた。こちら側はマリノ側の強い要求だと伝え聞いていたからだ。まあ、話など、どこでどう変化して伝わるかわからない。

「あなたとキスするなら、演技ではなく」

彼女は一旦そこで言葉を切り、まっすぐな眼で俺をみた。

「本気がいいから」

マリノの大胆発言に彼女以外の3人はギョっとして固まってしまった。

「振り回してごめんなさい。相原、行きましよう」

肩越しに一瞬見えたマリノの表情は少し疲れて、寂しそうで、いつもはちきれんばかりに元気があるだけに意外な感じがした。

その後も少しもめたが、結局最初の台本どおりキスシーンなしで物語を進める事になり、俺はホッとした。

数日たち、マリノからメールがあり、先日のマナージャーの失礼な態度を詫び、そして、それ以降は内容と気持ちを切り替えるような派手な絵文字付きの文章が続いていた。

1週間前にととうと念願の20歳になりました！

お酒を飲んでみたいし、最高のお祝いもしてほしい、約束してたよね、ねっ？

強引の1歩手前の文面を絵文字が中和している雰囲気思わず苦笑した。マリノらしい。

彼女の都合のいい日程と2人だとまずいので俺の友達を誰か連れて行くという返信を送ったら今週の木曜の夜だったらいつでもいいとすぐに返事が返ってきた。

俺の予定も今週中なら夜は空いていた。じゃあ、いい店決めとくよ、とマリノに送信したその直後に今度は美佳からメールが来た。

今日一日の出来事が書かれていた。

いつもなら温かい気持ちでそれを読むが、今日は少し違った。心が美佳を求めていた。マリノのまっすぐな気持ちに刺激されたのかもしれない。

内容には全くコメントせず、ただ「会いたい」とだけ返信した。それ以降のメールは返ってこなかった。

最初のメール以来、何かが進展したのかというとそうでもなかった。あの冬の日から何も変わっていない。どこにいるのかも、何をしているのかも、メール以外では伝わってこない。問いかけてもは

ぐらかされる。会うこともかなわない。

このメールの相手は本当に美佳なのか、という思いがよぎったが、すぐに打ち消す。美佳しか知らないことをメールで書いていたではないか。

違和感を押さえ込むのは真実ではなく、これが美佳であってほしいという願っただけだということに俺は薄々気がつき始めていた。

木曜の当日まで友人や知人にまで声をかけたが、誰も都合が悪く、その日の午後、山本君に相談したら彼が付き合ってくれることになった。

「なんだか、仕事の延長みたいで彼女に悪いよな。山本君も何か予定があつたんじゃない？」

「失礼ですね、プライベートではうるさく言いません。今日の夜は大丈夫ですよ。カズキさん、おいしいお酒のお店詳しいし。僕は個人的に三人でおいしいお酒飲めるの楽しみです」

仕事は厳しいが、プライベートでは一緒に楽しく打ち解けられる山本君は苦楽を共にする仲間のようで好ましかった。

山本君は本当に楽しみらしく、それからニコニコしながら夜まで仕事をしていた。

夜7時にマリノを迎えに行き、最初はお気に入りのイタリア料理の店に入る。

外観も室内のインテリアや雰囲気、そして料理の味も申し分ない店だ。

あらかじめ予約しておいた角の席に通される。さりげなく葉が多い観葉植物で仕切るようにしてあり、同じ空間にいながら少し他の空間と切り離されたような、個室のような席だ。

「僕なんかがついてきちゃって、仕事みたいで気を遣わせたらゴメンね」

席について改めて山本君が切り出す。よく見ると昼間と服が違っている。

夏らしく、麻の白いジャケット。薄青の開襟シャツとあわせて粋に着こなしていた。

「そんな、今日は私のためにありがとうございます。気になんてしませんよ、山本さんとは一度ゆっくりお話してみたかったです。ご一緒させていただけて光栄です」

マリノから爽やかな笑顔でそう言われて、山本君の鼻の下が少し伸びていた。

仕事だったら絶対に崩れない山本君のそういう姿を見て、俺はプツと吹きだす。

「なんです？」

「いや、山本君がデレデレになってるから」
「はっ？」

「なんだかオヤジモード全開だなあ、なんて」

「失礼な……オヤジだなんて。僕、カズキさんより年下じゃないですか」

俺たち2人の軽快なやりとりをみてマリノもプツと吹きだした。そこにあらかじめ頼んでおいたワインを持ってホールスタッフがやって来た。

「比較的飲みやすいの頼んでみたけど、口に合うかな」

あまり年代にはこだわらず、酸味の少ないフルーティな食前酒的なワイン。

スパークリングワインでもよかったんだけど、炭酸は好き嫌いがあるのでこっちの方が飲みやすいだろうと思い選んだ。

3人の目の前にグラスが置かれ、琥珀色をした白ワインが注がれる。やわらかい照明に透明な輝きがとても綺麗だ。

「じゃ、小湊さんの二十歳とお酒解禁のお祝いに乾杯」

カチリ、とグラスを鳴らして乾杯した。

マリノはグラスに注がれたワインを一気に飲み干した。俺と山本君はギョッとする。

「マリノちゃん、ワインは一気飲みするものじゃないよ。カズキさんのマネしちゃダメだよ」

「甘くて……喉がカツとするわ」

慌てて山本君がとめようとしたが、もう遅かった。

「おい、誰がワイン一気飲みするって？ いいんだよ、そういうムチャしながらお酒覚えていくんだから」

「カズキさん、ダメじゃないですか。女性にそんな飲み方勧めたらあれ？ プライベートではうるさく言わないんじゃないかなかったです？」

俺はニヤニヤして、山本君はうつと言葉に詰まった。

彼が正論を言うのをわかっているから、俺は突飛ないことを言える。プライベートな場ではちょっとからかいたくなる彼だ。

マリノが声を上げて笑い出した。ざわめきは止まっていけないものの周囲のお客さんの視線が少し集まったのがわかる。

ハッとして子供のような表情で口を押さえ、それでもクスクス笑っていた。少し落ち着いたのを見計らって、マリノは喋りだした。

「ごめんなさいね。なんだかとても楽しそうだし、楽しいから。私と相原はそんな風になれないわ。仕事もプライベートも事細かに干涉するし、全てのスケジュールを分刻みで監視するの。まるで籠の中の鳥だわ」

先日の相原さんの執拗な言いがかりを思い出し、マリノが少しかわいそうになった。

「それはさ、相原さんがマリノちゃんのこと心配しているからだよ。心配していない人に干渉したりしないからさ」

山本君がフオローに入ってくれた。

「先日は本当に申し訳ありませんでした。度合いは違ってもいつもあんな干渉をしてきて。でも、あの言いがかりは度を越えて酷かったですわ。本当に申し訳なくて、お二人には折りをみてきちんと謝らなければと思ってました」

相原さんの話をして、先日のことを思い出したのだろう。俯き加減のマリノの華やかな顔立ちに陰が落ち、まるで頬をなぞる涙のようにワンピースについたスパンコールがキラッと光った。

「あれは、終わったことだしもういいよ。しかし、そういうマネー

ジャーだと小湊さんも大変だな。でも、相原さんが一生マネージャーって訳じゃないだろうし、社長とか幹部に替えてもらうように言ってみるのもひとつの方法だと思うよ。君もそういう点では大変だろうけど、それは長く続かないから、踏ん張ってがんばりなよ」

何気に山本君を見た。続けてフオローしてほしかったのに何か違うことを考えているみたいで口の端がニツと笑っていた。

「あ、カズキさん、マネージャー替えてほしいんですか？僕だと何かご不満でも？」

「え？！ そんなこと言ってないだろ」

「母親とか姑みたいとボヤいているのは知ってますが」

「は？！ 誰からそんなこと聞いたんだ」

「否定しないんですね」

「いや、それは……」

山本君に完全にやり返されている。彼のニヤニヤは止まらない。

でも、マリノの様子を見ながら話しているので、彼女を元気付けようとしていることは確かだった。

「まあ、やんちゃするカズキさんには僕がいないとダメですよね。

これからもしビビシ母親の役させていただきますから。でも、一応言っときますけど僕、男ですからね」

「……見りゃあ、わかる」

勝ち誇ったように笑う山本君をみて、マリノが笑い出した。

そこにちょうどいいタイミングで料理が来た。彩りよく盛り付けられた前菜だ。

「ほら、料理も来たし、そういうマネージャー話は置いて、食べようぜ。今日はお祝いだ」

ちよつとふて腐れたように言くと、山本君とマリノが笑い、それにつられて俺も笑みがこぼれた。

2件目は隠れ家のようなカクテルバー。

裏路地に入った、ビルの地下にあり、目立たないけれど、知っている人は知っている店だった。

俺も山本君もマリノも楽しさも相まって、そこでかなりの量の力クテルを飲んだ。

明日の事もあるので日付が変わって少しして、そのバーを出た。

「かぁーごめかごめ、かーごのなーかのとぉーりーは」

マリノはかなり酔ったらしく、童謡を歌いながら俺たちの前を上機嫌に歩いていった。

「マリノちゃん、飲みすぎだよ」

一番飲む量を控えていた山本君がマリノをたしなめる。が、ケラケラ笑いながら言っているので全然注意しているように聞こえない。籠の中の鳥、マリノは自分のことをそういった。

しかし、俺はマリノが仕事に対してかなり悩んでいるんだろうと思っただけで笑えなかった。

食事の時は聞き流していたが、上機嫌そうに見えて、見せている背中が寂し気だった。

「どーこーにも、にげられない・・・」

語尾が震えて涙ぐんでいたのは気のせいだろうか？

俺はマリノに問いかけた。

「でも、好きなんだろ、今の仕事？」

マリノは足を止めて驚いたようにこちらを見た。

「踏ん張りどころだよ。逃げたいと思うくらいなら、もっと努力して誰にも文句言わせないような大物になればいい。その頃には、周りでするさく言ってる奴らなんて気にならなくなるさ。がんばって自分の居場所つくりなよ」

なっ？と幼い子を諭すように少し笑った。

なんだかんだ言ってもまだ20歳になったばかりの『若い子』なのだ。人生経験も浅くて、傷つきやすい。自分もおってきた道だ。気持ちは少しはわかる。

と、突然、そのままの格好で止まっていたマリノが「うっ」と口元を押さえてその場に座り込んだ。そして這うようにして歩道の端に寄る。

慌てて駆け寄り彼女の背中を支えた。

「どうした？」

「き、気分が悪い」

「ちよつと飲みすぎたか。タクシー呼ぶから、ちよつとこのままで待ってて」

離れようとしたら、とっさに服の袖を掴まれた。

眉根を寄せてギョツと目を閉じている。

このままの体制で気分の悪さに耐えているらしい。

仕方ないので、近くにいる山本君の姿を捜してタクシーを呼んできてくれるように頼んだ。

彼は頷き、タクシーを呼びやすい少し離れた歩道の植え込みが切れているところまで走っていった。

「来て」

「え？」

「いいから来て！」

彼女はいきなり有無を言わせぬ強い口調と同時に立ち上がった。

そして俺は腕を引っ張られてよろけながら立ち上がり、いつの間にかマリノと共に走り出していた。

道なき道を走る。

いや、道はある。繁華街だ。でも、酔いが回った状態で全速力に近いスピードではどこをどう走ったかわからなくなってしまう。

動悸が速くなり、嫌でも息が上がってしまい、苦しさを紛らすために、斜め前を走るマリノを見た。

たしか今日彼女は、踵の高く細いミュールを履いていた。

よくもまあ、そんな靴で速く走るものだとは何気に目線をあげたら、走る衝撃に従うように大きな胸が上下に揺れていた。見てはいけないもののような気がして、慌てて目を逸らす。

しばらく走ると、木々で囲われた芝の敷いてある公園にたどり着いた。夜中のせいかな気はない。

マリノは迷わずにその公園に入って少しして、ようやくゆっくりと歩き出した。お互い息が荒い。

「いきなり走り出してどうしたの？」

気分悪いのに走るともつと酷くなるから、と言おうとした矢先にマリノはうつと呻いてその場にしゃがみこんだ。

ほら、言わんこっちゃない、とマリノの傍らに座った瞬間、力任せに体当たりされた。

一瞬何が起こったのかわからなかった。薄暗くて、おまけに酔いで感覚が鈍っているせいで、マリノから押し倒されていると気がつくまで少し時間がかかった。

その隙を突くかのように。

唇にやわらかい感触。

マリノが俺に口付けをしていた。

目を見開いて、慌てて起き上がろうとする。

それを押しとどめるように彼女は角度を変えて何度も何度もついはむようなキスをした。

息つくことも忘れていて、お互いがキスの合間に苦しくて喘ぐようにしてしまった呼吸は、リアルに淫らなことを連想させた。次第に頭の芯が痺れてきた。

（小湊さん相手に何考えてんだ……）

やたらに艶かしい表情をしたマリノが霞んだ視界に入ってきた。

「カズキさんが好きなの。あなたがどうしても欲しいの。もう我慢できない」

潤んだ熱っぽい瞳がこちらをみている。情熱的な言葉に小さく鼓動がはねたと思ったら、マリノは今までよりももっと深い口付けをしてきた。

不意打ちとはいえ、このままでは理性が吹き飛びそうだった。

いけないとは思いつつ、このまま流されてもいいかという気にもなっていた。

いい加減、決着のつかない想いに少し疲れていた。安らぎが欲しかった。確かなものが欲しかった。

不確かな何かをずっと想い続けることは苦しい。

少なくとも、目の前には確かな存在がある。俺のことを心底好きで体当たりでぶつかってきてキスして。

マリノは悪い子じゃない。このまま流されてその後はその時考えても……。

彼女の真剣さに比べて自分は安易に考えていると思ったけれども。

「好きなの。本気で好きなの。だから」
本気をあらわすような低い声。

多分、マリノの真剣さに比べて、自分は安易に考えお手軽な方へ進もうとしたから、運命からしっぺ返しされたのかもしれない。
続いて出てきたセリフで自分の真実、現実を突きつけられた。

「美佳なんて人に絶対負けない」

愛しい人の名前。

真剣な声で言われて余計に心に突き刺さった。

凍えるような満月の夜に逢った儚い人。

喪失感に苦しんで、俺に手を伸ばしてきた細い指先。

時折見せてくれた、冬の陽だまりのような笑顔。
寒い冬の朝に突然消えた美佳を。

俺は。

今でもさがしてる……。

視界がグルリと大きく回って世界が暗転した。

多分、気が遠くなったのは一瞬だったと思う。

気がついて目を開けたら、空一面の星空が見えた。

周りに外灯が少ないのと、月が出てないせいだろう。

冴えた輝きを見ていたら、自分の心も澄んでくるようですつと冷静になった。

ここに星空がなかったら。美佳の名前が出てこなかったら。もしかしたら。

でも、偶然に俺を本来の場所へ呼び戻した。

「こんな都会の真ん中でも星が見えるんだな」

季節はちがうけど、俺と美佳が出会ったのもこんな必然な偶然が重なったんだ。

だったら、大都会のこの街で、こんな星のきらめく夜に心を偽れない。

「……俺が出会った頃の美佳はこの星空のように繊細な感じだった。」

俺が冷静になったのを見て、今度は攻めてばかりだったマリノが固まってしまった。

それを確認して、俺は身体を起こした。

「小湊さんも見てみるよ。星が降ってきそうだ。東京では珍しい光景だね」

ふたりで空を見上げる。

「君と一緒にいて、この星空を見上げていても考えるのは美佳のことだ。俺は今でも突然消えたアイツをさがしている。美佳が好きな

んだ。俺のことは諦めてほしい。本当にゴメン」

「……ずっと逢えないのに？ どうして？ 美佳さん、突然姿を消すなんて、カズキさんのこと好きだったわけではないんでしょ？」
「さあ、それはどうなんだろうね？ 美佳に逢えたら聞いてみないと」

マリノの非難がましい言い方に、苦笑しながら美佳に直接聞いてみる場面を想像してみた。

逢えたら……。

いつか逢えたら、聞いてみよう。

そんな些細なことを考えるだけで、美佳に逢えることを考えるだけで少し幸せだった。

「そんなの報われない……」

マリノが放心したように言い放った。

「君は報われないから人を好きになるの？ 好きになってくれるから好きになるの？ 人の心はそんなに単純じゃないよ」

「……」

「今の状況が幸せかと言われればYESとは言いがたい。でも、それ以上に好きなんだろうな。もう一度アイツに逢えたら、もうこれ以上欲しいものはないかもしれない」

この星空を美佳もどこかで見ているだろうか？
俺がみている同じ星空を……。

そんな風に思った。

Track 5・ 星空

この恋のカタチを

あの星空から見下ろしたら

どんな風に 見えるんだろう？

君の声が不意に聴こえた午後

ふたりで行った海がよみがえる

波音が聞こえた気がした

好きという言葉を

優しさという

曖昧な態度で隠してた

照れてたんじゃない

拒まれるのが怖かったんだ

あの時 好きと言えてたら

何か変わっていただろうか？

この星空を 君とふたり

見上げていたかもしれない

見えない恋

きみにもう逢えないなら

このままひとりきり

いつそこのまま

想い出に抱かれて眠りたい

L
y
r
i
c
s

K
a
z
u
k
i

S
a
h
a
r
a

『明日の午前中、東京駅で待ってる』

文字を追うと同時にしばらく俺の時間が止まった。

珍しく深夜に來た美佳からのメールにはそんな事が書いてあった。正直最初はうれしさより驚いたけれど。今度こそ本当だろうか？

マリノとの出来事から数日経っていた。

あれから俺たちはしばらく話して、折りを見て解散したのだが、何かあったらどうするのか、山本君からはかなりきつく叱られた。

山本君の言う「何か」とは、事故とか怪我とかそういうのではなく、週刊誌にゴシップを載せられることだ。

俺のキャリアに傷がつくことだ。

少し暗澹たる気持ちになったが、最後に「自分がついていながら申し訳ありませんでした」という彼の言葉を聞いて自分のことも戒めているのだと気がついて、少し気分が和らいだ。

もちろん、彼の言うことに間違いはない。この仕事をしていく以上、普通以上に気をつけなければいけないことも多いのだ。

例えば女性との恋愛とか。遊びでも本気でも。そういう類のものは。

でも。

美佳の件に関しては別だ。

何かを気をつけるほどの余裕がない。逃すのならいつそのことの身を晒すまで。

この先どうなろうと、逢いたい気持ちは止められない。

『何時に場所はどこにする？』

メールを返信してみたけれど返事はしばらく経っても返ってこない。

結局、この夜は携帯を見つめたまま夜を明かした。

「東京駅って広いんだけどな」

次の日の朝9時。俺はJR東京駅の正門前にいた。

美佳からは今に至っても具体的な時間や場所の連絡がなかったが、とりあえず、九州方面発着の新幹線ホームへ行ってみる。

ラッシュは過ぎたとはいえ、人は多い。間を縫うようにして、美佳の姿を探した。

この時間にこの場所にいるとは限らないけれど、しかし、何かしら行動していないと落ち着かない。

（こんなに人はいるのに……）

なぜ、この中から美佳を捜しだせないのだろうか？

人が忙しなく行き交う空間を見つめていると、不意に寂寥感が襲ってきた。

君をいつまで想えばいい？

見つからない君を捜して俺はどこにたどり着くのだろう？

ぼんやりしながら、視線をずっと遠方にやる。

と、ふと、川の流れのような人の動きの中、立ち止まってこちらを見ている人を見つけた。

女性？随分華奢だな……。

ドキリ、と胸が鳴った。必死に目を凝らしてみる。

長い髪、白いノースリーブから出た細い腕。一目でわかる華奢な身体つきと儚い雰囲気。

細かいところまではわからなかったけれど。

「美佳……」

思わず呟いた。間違いない彼女は美佳だ。

立ち止まった俺に後ろから流れてくる人たちが迷惑そうな顔をして避けていくのにも構わずに、お互い随分長い間見つめあった。でも、そんな気がしただけなのかもしれない。

突然彼女は翻って逃げ始めた。俺に見せる背中が少しずつ小さくなっていく。

「美佳！」

ハッとした俺は慌てて彼女の後を追った。

あまりにも多い人波にもどかしさを覚えながら必死に進もうとするのだけど、なかなか思うようにいかなかった。

それは向こうも同じことだったらしく、小さかった背中がだんだん大きくなり、美佳との距離が縮まってきて。

もう少し、あと、もう少し……。

多少強引に突き進みながら、必死に手を伸ばした。

長い髪、細いけれどここにいる確かな存在感。

もう、小さな幻影ではなかった。もう少しで手が届く。

「美佳！」

俺の声が聞こえたのだろうか？

美佳はビクリとなり足を止めた。その間に俺は追いつき、彼女の右腕を掴んだ。

振り返ることなく少し、抵抗したと思ったのは気のせいだったのかもしれない。

でも、この手を振り切られれば、また逢えなくなると俺は動揺した。

人ごみの中だとか、俺がミュージシャンで、なんて一切考えなかった。

俺は佐原一樹という一個人で、目の前の愛しい人をただ失いたくなくて、強引に後ろから力一杯抱きしめた。

「美佳……」

切ない弦きが零れ落ちた。

どれほどの時間、君を捜し、待ったのだろうか？
やっと、やっと巡り逢えた。

もう、離さない。

「……で、何がどういう事情でこんなことになっているのか、わかるように説明してもらおうか？」

これは俺の本音。心の叫びだ。

30分後、東京駅から少し離れた路地裏の喫茶店。

ここなら大丈夫、と彼女に連れてこられたのだが、なるほど、薄暗い上に客もいなくて、マスターは俺たちに関心がないのか、俯いて黙々とグラスや食器類を磨いていた。

俺は美佳を後ろから抱きしめた。

でも、それは短い時間だった。

なぜなら、肩越しに少しだけ振り向いた顔は、美佳によく似た別人だったから。

慌てて離れると、様子をみて彼女は哀れんだように少しだけ笑った。

「美佳さんに、似てますか？」

「……」

華奢さも、儚げな雰囲気も、顔の作り、髪長さや質感さえよく似ていた。でも、よく似た別人だった。

それより、どうして、俺とも、ましてや美佳とも面識のない彼女が美佳の存在を知っているのだろうか？

驚きと混乱で言葉が出ない。

「条件を承諾していただければ、カズキさんの疑問に答えます」

彼女はきちんと向き直り俺を見上げた。

そんな何気ない仕草まで、彼女は美佳に似ていた。

「私は、佐藤香緒里と申します。まずは、このような形でお会いするようになったことをお許し下さい」

許すも何も、こちらは事情が全くわからない。

その流れでの先般の言葉だった。本当に何がどういう事情で？

「……で、君の言う条件って何？ それがのめないと話さないんだろ」

お互いが言いたいことをいつているせいで、話がかみ合っていない。
「条件は、……うちの社の社長と編集長までに話を持っていかないことです。端的に言えば、私とカズキさんの間でこの件を解決すること」

「……」

完全に向こう側の都合の条件だった。

「……いいだろう。そのかわり、納得できるように説明してほしい」
彼女はゆっくりと頷き語り始めた。

「まず、私が今の出版社に就職できたわけ。その一番の大きな理由は、カズキさんが想いを寄せる『後藤 美佳』さんに似ているから」
「美佳に、似ているから？」

彼女は驚いた表情の俺を見ながら話を続けた。

「そう。私は美佳さんが消えた直後の春に入社しました。一度入社試験に落ちたものの、急遽内定取り止めになった人の補充で急遽採用になったんです。研修が終わってすぐに社長室に呼ばれて美佳さんの写真を見て、どうして私が急に採用されたのかすぐにわかりました。でもそれ以上にビックリしました。全くの他人なのに美佳さんと本当によく似ていたから。」

社長と編集長から直々に私に与えられた任務。

通常の仕事とは別に、誰にも知られないようにカズキさんの行動

を見張り続けることと、美佳さんとの間にどういう事があったか取材することを命じられました」

「……ワケがわからない。どうして、そんなことをするのか、それより君のところの出版社がどうして美佳の写真を持っているんだ？」
「社長と編集長はカズキさんがデビューした時から惚れこんでずっとカズキさんを追っているの。だから、美佳さんの写真も隠し撮りで入手したそうです」

ストーキングまがいと隠し撮りか……。
心の中で、重いため息をついた。

ストーキングされるとか、人気がある奴になら聞いたことがあるけれど、俺にまで及んでくるなんて考えたことなかった。

「知らなかったな」

「知られたら、何かあったときスクープできないじゃないですか」
彼女は自虐的に笑う。

「社長と編集長はカズキさんに惚れこんでずっと追ってて、そして美佳さんの存在を知った。スクープもしくは独占取材を、と思っていた矢先に美佳さんは突然消えた。」

2人はその理由を突き止めたかった。だから、私を使って、カズキさんに近づくように仕向けた。

あなたのスクープをどうしてもうちの社であげたかったみたい。

美佳さんに似ている私になら、全てを話すと考えたのでしよう。

そして、あわよくば、カズキさんが美佳さんの代わりに私を側に置くようになったら、あなたの全てを知れる事ができると考えているみたい」

「俺の全て？ 確かに俺はプライベートのほとんどは話さないし、必要なこと以外伏せているけど、どうして、そこまで？」

こういう仕事をしていると、仕事とごく個人的なことの境目が曖昧になってくる。

俺の歌を好きでいてくれるファンは大事だし、仕事も好きでしていることとはいえ、私的なことまで知らない誰かに覗かれては気が休まらない。

「カズキさんは自分がどれだけ大きな魅力とカリスマ性を持っているか自覚していない。特に美佳さんが消えた後の、光と影の心と雰囲気を持ち合わせるあなたの魅力にどれだけの人間が注目しているか気がついていない」

「……さっさとスクープすればよかったのに。俺は構わなかった」

自分自身に関する話は苦手だったので話を変えた。カリスマとか光と影の心とか、聞いたこっちが落ち着かない。

「カズキさんも美佳さんという時は周りを警戒していたでしょう？写真が美佳さん一人しか写っているものしかなかったから。こちらとしては決定的で確実なものが欲しかったのです。そんな曖昧なものより、時間をかけて佐原一樹という人間の全て、骨の髄まで引き出せって編集長命令があったから」

「……」

聞いていて背筋が寒くなった。

そんな重いことをさらっと言える彼女の気持ち理解できなかった。

「そんな仕事で君は辛くないのか？ 影からずっと俺を見張って、それに……」

美佳の代わりなんて……。

言葉には出せなかった。

美佳の代わり、という彼女の存在を否定するみたいで憚られた。

しかし、紡げなかった言葉を彼女は何か察したらしい。

淡く笑うその表情は美佳を思い出させて、胸が切なくなつた。

「社長と編集長ほどじゃないけれど、私もカズキさんがデビューしたときからのファンです。

特別任務を与えられた事情を知ったとき、私は天にも昇るほど幸せでした。カズキさんをずっと見ていられることと、なによりあなたが、私にそっくりな美佳さんを好きなことに。

上手くいけば、美佳さんの代わりにカズキさんの彼女になれるかとも思いました。

社長と編集長と私の思惑と利害関係が上手く一致した形になりました」

「美佳に似ているからって、好きになるほど俺はいい加減じゃないつもりだけど」

「いい加減じゃないかもしれないけど、強いわけではない。マリノさんのことも見ていました」

「！」

マリノと口付けをしたあの夜の出来事を見ていたのだろうか？

「言っただじゃないですか。あなたをずっと見ているのが仕事だつて」
彼女はそういつて自虐的な微笑みを浮かべた。

「カズキさんが興味ない小湊マリノのことをあげたつて、そんな小さなこと何にもなりはしない。

欲しいのはあなたが本気で好きになつた美佳さんとのことで、そしてそれに対するあなたの想いの全て」

彼女は一旦言葉を切つて、注文してあつたコーヒーを飲んだ。

ここへ来て、注文したコーヒーはもちろん、水すら飲んでなかったことに気がついた。

「最初はただ楽しかった。あなたを見ていられるだけで幸せだった。でも途中からカズキさんに絡んでくる小湊さんが出てきて少し不愉快だった。」

私はあなたを毎日見ているのに存在すらわかってもらえなくて話をするこゝとすら出来なくて。

だから、私も少しアプローチを仕掛けた。私の姿を遠くから見せて、戸惑わせてみたり、『美佳』さんとしてメールを送ってその後のあなたのうれしそうな表情をみたりしたら一瞬だけ満足したわ。

でも、本当に一瞬。カズキさんに関われば関わるほど美佳さんをずっと想い続けている事がわかって辛かった。

小湊さんの誘惑を断った時、多分、私でさえ無理だろうと思った。私は佐藤香緒里であつて、美佳さんではないから。

どこへ行つても何をしていてもあなたは美佳さんをさがしている。あなたを見ていてそれがよくわかった。

私は美佳さんにはなれない。

だから、私はこの任務からもう降りる。出版社も辞めて田舎に帰るわ。

私の弱さでこの計画は潰れた事とストーカーまがいのことまで知られて、これから先こういうことをしたら、場合によっては訴えると言っていたといつておく。だから、カズキさんも私に免じて全てを水に流してほしいの」

「何もそこまでして、それに仕事まで辞めなくても」

「この1年半で利害関係が絡む濃密な人間関係を見てきて少し疲れだから。あと、ストーカーされたら私だって嫌だし、真っ直ぐなカズキさんを見ていたら、こつちのやり口に段々納得いかなかった

の。

折角採用されて、それなりの恩あるところに砂をかけて消えるみたいだけど、一旦何もかもスッパリ切ってやり直すわ。ただあなたの歌は好きでいる」

彼女はそう言い切ると真っ直ぐに俺を見て笑った。

「そういう笑顔がいいよ」

「え？」

「今さっきまでは、自虐的というか皮肉な微笑みしか出なかったのに、君自身の思いを言った今の笑顔は真っ直ぐだった。身代わりとか誰かの代わりとかはするべきではないよ」

虚を突かれたように彼女は目を見開いた。

そして、そうね、と相槌を打って、冷めたコーヒーに口をつけた。
「あと、もうひとつ気になる事があるの。アサトさんのことなんだけど」

「アサト？」

「どうして、ここでアサトが出てくるのか？」

「ちょっと前……夏ぐらいになるんだけど、カズキさんのマンションの下で張り込んでいたら、偶然アサトさんに見つかってしまったの。」

美佳さんのことをぼかしながらも詳しく教えてくれて。あと、海に行った時あったでしょ？

あの時、アサトさんは小湊さんと長いこと話し込んでたわ。

彼が絡むとそこらなんだかおかしな方向にいく感じを受けるのよね。あと……」

話を続けていた彼女は少し言いよどんだ。

「あと、何？」

「アサトさんと話した時に、美佳さんの消えたわけを知っているかも、みたいなことを言っていたわ。彼は何か知っているのかもしれない」

私たちの想いの果てはどこにあるのかしらね、と呟くと美佳に似た彼女は儚く遠くを見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702r/>

きみをさがして

2011年11月10日03時13分発行